

# 敵地でも客集ろうクラブ必要

今のJリーグには「公共財」

のようなクラブが必要なのだと思ふ。全国区の人気を誇り、アウェーでも客を呼べるクラブだ。全クラブが地元の支持だけで満足しては、本当のプロスポーツ、エンターテインメントとは言えない。

カズやラモスがいた草創期の  
V川崎（現東京V）、中山、ス  
キラッチや名波、ダウンガらが  
魅力的なサッカーを展開した磐  
田がそうだった。スターの存  
在、サッカーの質の高さがホー  
ム、アウェーを問わずファンを  
呼ぶ。

## Jリーグを 学問する

平田竹男



①

他に先駆けてアジア制覇に本腰を入れた浦和も、そうなりかけた時期があった。

私が2002、06年に日本サッカー協会専務理事を務めた頃、天皇杯の抽選で、浦和の試合会場を割り当てられた地方協会は「お客さんが入る」と喜んだものだ。

そんな存在を目指すには、クラブ側の努力に依存するのは酷。それだけの投資が回収されるビジネスモデルを作る必要がある。リーグ側から仕掛けを施せるのではないか。

例えばテレビ放映権。Jリー

グは、一括管理してスカパーなどと契約を結んでいる。リーグに入る放映権料（推定で年間約50億円）はクラブへの分配金の主要財源だ。

分配金は、経営規模の小さいクラブの収入のよりどころ。脱落を防いで共存共栄を図る志が一括管理方式にはある。しかし、巨人が一人勝ちした時代のプロ野球のような不平等をなくそうと、やりすぎたかもしれない。

そろそろスペインのように放映権交渉をクラブに委ねてはどうか。クラブスポンサーとの連携の新機軸、3Dを使ったリブレ……。各クラブの事情に適したアイデアを生み、中継の価値や放映権料が高まる可能性が

ある。一方で放映権料の一部をリーグに納めさせ、分配金は確保する。

アジア連盟は、アジア・チャンピオンズリーグ進出クラブへの金銭的手当を大幅に増加させた。次はJリーグの番だ。絶えず自前のスターを作るが大阪、攻撃サッカーが魅力の川崎。いつかはアジアを夢見る新潟。裁量を与えれば、潜在能力を秘めたクラブは少なくないと思う。

◇

日本サッカー協会前専務理事の平田竹男・早大大学院教授（スポーツビジネス）に、4回にわたり、Jリーグを中心とした日本サッカーの課題について語ってもらいます。